鹿沼の自然・栃木の旅

月報第37号

（2015年10月）

仁部富之助『野の鳥の生態』、詳細は3頁から

「…仁部がすごいのは、野鳥の習性を見つける眼だ。私も長い間、バードウォッチャーのはしくれとして、野鳥を見ているのだが、仁部のようなシーンにぶつからない。それは、仁部が運がよいのではなく。野鳥を見る眼が違うからだと思っている。／　現在の多くのバードウォッチャーの鳥の見方は、仲間同士の競争で野鳥の名前をいい当てることが中心だったり、珍鳥を見つけるのが目的だ。どちらも、出会った野鳥の名前がわかれば、おしまい。名前がわかってしまえば、次の鳥を探しはじめるバードウォッチングなのだ。だから、一羽の鳥、一群れの鳥を見つけたら、そこから観察をはじめる仁部とはおのずから違う。／（中略）　このような、仁部の数々の報告を読むたびに、なんと私たちは野鳥のほんの一面しか見てこなかったのだろうと、大いに反省させられるのだ。」

（松田道生『野鳥をよむ』（21頁参照）による紹介文より）

北光クラブ

自然観察クラブ　鹿沼

☙　山行案内　❧

芳賀、風薫る山里のみちハイキング
～七井駅より芳賀富士を越えて茂木駅へ＋ＳＬ乗車～

益子駅に車を置いて真岡鉄道のディーゼル車に乗車し、次の七井駅で下車します。ここから「風薫る山里のみち」をたどって芳賀富士（272m）に登り、茂木駅を目指して歩いてみましょう。途中、安善寺、熊野神社、安楽寺に参詣します。芳賀富士はおよそスギの森ですが、熊野神社の鎮守の森であることもあって、コナラの大木など、原生の森の趣も保っています。安楽時には丈六阿弥陀堂があり、堂内に木造丈六阿弥陀如来坐像（県文化）が安置されています。推定樹齢 600 年以上のケヤキ（県天然）もあります。途中所々で見られる二十三夜塔などの石碑を調べるのも一興ですね。

帰りは SL に乗って益子まで戻りましょう。秋の芳賀野散歩にぜひご参加ください。

日　時：１１月２２日（日）AM6:00　北小西門集合（解散は PM5:00 頃）
行　程：鹿沼 AM6:10――7:30 益子駅 8:11＝＝8:16 七井駅（40 分）……
　　安善寺（10 分）……熊野神社（10 分）……芳賀富士（85 分）
　　……安楽寺（80 分）……茂木駅 14:26＝＝15:01 益子駅――鹿沼
服　装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴
持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
　　ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート
必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、スパッツ、
　　熊鈴、ザックカバー、
　　参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩）、
　　1/25,000 地形図は「真岡」「中飯」「茂木」
参加費：ガソリン代等　おとな 600 円、子ども 300 円、
　　乗車券（益子→七井）おとな 190 円、子ども 100 円、
　　〃　（茂木→益子）おとな 550 円、子ども 280 円
　　＋SL 乗車整理券 500 円
　　今年度初参加の方は保険料 1300 円（3 月まで）
問合せ＆申込み：電話 090-1884-3774（阿部）

11 月 15 日(日)
実施予定の
変更版です

12 月の予定は
17 頁に！

ꕥ 表紙の本 ꕥ

仁部富之助著『野の鳥の生態』

（昭和11年7月10日・巣林書房発行）

序

仁部富之助氏は当代稀に見る篤学の士である。頭脳緻密にして、行く所可ならざるはない。本来は農事試験場陸羽支場にあって米の研究を専門とし、その品種改良に特筆すべき貢献を残されて居る。鳥学の方は寧ろ余技だが、これがまた素晴らしい余技である。幾多の鳥類専門家が此の謂わば飛入りの門外漢に蒙を啓かれるの奇観を呈した。観察の精緻、着想の警抜、鳥学の沙漠を旅する者に、それはどんなにか魅力あるオアシスであったろう。

曾て私は、氏の材幹を惜しむの余り、東京の去る官庁へ栄転を薦めたことがあった。所が言下に断られた。その理由がまた簡単で、曰く、「東京などへ行っては研究が出来ません」というのである。断られて私は嬉しかった。正に然りだ。僻陬に蟠踞して、野鳥との生活何十年が、氏の創見の原動力であり活力素であったのだ。然し、普通の人であったなら、恐らく私の誘いに応じて居た事であろうと思う、氏なればこそである。

氏の研究は徹頭徹尾現実主義だ。あくまでも実地の観察の上に立ち、推理や臆測は極力これを避けて居る。今に於て白状すれば、本書の起稿されたことを聞いた当時私は密かに懸念した。その想像的要素を欠如する点が、一般向きの読物としては時に或いは興味を減殺する結果を来しはしまいかと。幸にしてこれは私の杞憂であった。苦心の集稿を拝見すると、何うして何うして、中には小説以上に興味深甚なるものがある。著者は科学の扉に、溌剌たる生気を吹き込んで呉れた。自然観察の方法と態度と、学問の本質とを示唆して呉れた。面白い読物として広く一般読書界にお奨めすると同時に、鳥学の専門家諸氏にも是非一読せられんことを切望する。

昭和十一年初夏

内田清之助識

はしがき

私が野の鳥に特に親しみを覚えるようになったのは、大正の初頃からであった。即ち当時、農林省農事試験場陸羽支場、種芸部主任であった農学博士寺尾博先生が、公務の余暇に稲作と密接関係ある鳥類、就中「雀の生態的研究」を許され、しかもその方法を示教せられたのが抑々の始りである。

爾来、専ら農学博士内田清之助先生に師事し、終始鞭撻と便宜を仰ぎ乍ら、今日に及んだのである。

併し、常に秋田の片田舎に住居することとて、野外に於ていろいろな問題に遭遇してもそれには自分の観察を一層周到にし、また実験によって解決する以外に、学ぶ可き途はなかった。だが、こつこつやっている間に、門前の小僧にも、これまで疑問であった事柄や新しい事実が、ぽつりぽつり判るようになり、この方の研究に却て興味を持つようになった。

本書は永く鳥と親しむ間に、観察と実験とによって学び得た彼等の生活の一部を、非才不文を顧みず、興味を本位として通俗的に書いたものである。併し、蒐集した鳥類は地方的に偏し、しかも平凡なものばかり多いことは、私の境遇上止むを得ぬことである。又書中には不備、誤謬の点も斟なからずあるであろうが、それは何時か機会があれば補綴訂正したいと思っている。

尚、この書の編纂に当っては、寺尾先生より編集上種々の御注意を頂き、又本書の成るや内田先生から序文を賜ったことは、唯々感銘の外なく、茲に謹で両恩師に鳴謝する次第である。更に又石澤慈鳥・下村兼史両氏の御援助に対して心から感謝する。

昭和十一年五月

著　者　識　す

初版本には 18 章にわたって各種の鳥が取り上げられていますが、その中から例として「ウソ」について書かれた１章をご紹介します。

一八　鷽の悪戯

ウソは雀科に属し、体はスズメより少しく大きい。雌の羽色は甚だ地味であるが、雄は非常に美しく、頭や翼、尾は黒く紺光りがし、頬から咽喉にかけて紅い。又啼声は「鷽吹く」と言われる通り、ヒー、ヒーと丁度口笛を鳴らすように優しい。しかも体質頑健、餌も面倒がないので、古から飼鳥として賞讃される鳥である。

彼等は東北地方の山地でも蕃殖し、秋になると団体をなして南方に移動する。だが、一部は平原地帯に逗まり、数羽、数十羽つれたち、互に鳴き交しながら、山から山へ林から林へと放浪の生活をつづける。

越冬期の食物は、専ら木芽や蕾である。梅や桃の花蕾を食い荒して物議を醸すのもそのためである。しかし、東北――秋田地方では、梅や桃よりも桜の被害が甚大で、動もすれば公園、社寺境内は言う迄もなく、庭園内の桜を襲うて、やがて爛漫と咲き誇る桜花――大和魂を象徴する国民憧れの花――を蕾の内に食尽し、各地の小さい花の名所が全滅し、人々の一春の行楽を台なしにする。この大それた悪戯者の行状記を物してみよう。

日常生活　ウソが桜の蕾を啄み始めるのは、普通降雪期となってからであるが、地方人の言うように、必ずしも雪の多少や早晩とは一致しない。だが、降る雪は彼等が摂食の際に溷す無数の蕾の破片を、次ぎつぎと蔽い隠してしまうから、余り世人の注意を惹かない。だから或意味では彼等を庇い、存分に悪戯をさせるものは降る雪であるとも言える。

彼等は一度蕾の味を占めると、春までそこに踏み逗って食い続ける。しかし、彼等仮令「食」に恵まれても、やはり休憩所が無ければならず、避難所や塒場も必要で、その理想的の休憩所、避難所、塒場は樹の茂み――東北地方では専ら杉か松の常緑樹林である。

摂食に忙わしい樹上の彼等は、人が大声で威しつけてもびくともしない。雪弾が飛んで枝に当るか、自分が危くなると渋々別の枝に遠のくが、それも仲間の誰かが逃出したならばと言った様な図々しい身構えである。だが、さすがに銃声には驚いて一時避難する。けれども、物の 10 分も経てばぽつりぽつり戻って再び食い始める。しかし、これとても相手（人）を見ている場合のことで、敵の所在が判らないと、一発喰っても一寸食い方を止めて、きょろきょろ辺りを見渡すだけである。

（次ページへ続く）

私は或日調査の必要のため、杉の密林の中に体を隠して、高い桜の梢に縋りつく十数羽の一群を狙った。ところが、銃声と共に枝から次ぎ次ぎ仲間の姿が消えて行っても、その都度きょろきょろ四辺を見渡すだけで、大半がやられても敢て逃げようとはしない。２度、３度、４度、目下の密林から起る銃声にも、左右、前後から同胞が転げ落ちても、敵が目に映らない内は、危険が身に迫っていることを感づかない様子であった。大胆なのか、図々しいのか、愚鈍なのか一寸判断に迷う。

玉川堤の桜の全滅　さて、ウソの桜花食害時の生活はこれ位にして、昭和２年に於ける地方的桜の名所「玉川堤」の被害を主とする彼等の悪戯に移ることにしよう。

玉川堤とは羽州街道随一の長橋（660米突）玉川橋両端の堤防を中心に、橋の南端から西方へ大戸川に沿い、雄物川を距てて松山に至り、又東方はやはり大戸川沿に県立鮭鱒孵化場構内までを含む地域一帯である。そしてここの桜の大部分は俗に「大吉野」と呼ぶ樹勢が旺盛で花着のよい樹齢 3、40 年の大木百数十本である。

この玉川堤の花は、昭和２年の春には全滅の状態であった。私は大吉野種だけについて、１本１本の被害程度を目測して、後でそれを総合した所によると、山麓は９割９分、南岸一帯は８割乃至９割、同北岸は５割、全体として７割か８割の被害であった。こうやられては、この花の名所も先ず以て全滅の形であった。

しかし、これは決して無数のウソが襲来して花蕾を食い荒したのではない。私の日常注意を払った中心地帯――南岸の堤防だけで言えば、その加害者は僅か 20 羽内外、多く見積っても 30 羽足らずの少数であった。即ちこの 30 羽足らずのウソの一群が冬の初めから春までに、百幾本かの大樹の蕾を斯く見事に平げたのである。

すると、ウソは怖る可き暴食漢か。否、否、彼等は寧ろ少食者である。――というと、話がややっこしいが、実は、彼等は度はずれの潔癖家、桁はずれに贅沢な食い方をするので、実際腹に入る分量に割合して無駄が多く、こういう結果になるのだ。もしも彼等は蕾をそのまま嚥むのであれば、花蕾はよしんば小さくとも、20 羽か 30 羽で一冬食い通しても、その消費量は幾何でもなく、素より春となっても、人々を落胆させはしない。

摂食の仕方　先ずこの悪戯者の蕾の摂り方を観てみよう。枝に縋って摂食に余念のない彼等を観、又足の踏み所なきまで樹下に散乱する食滓した物質、梢上に残る被害蕾の跡等によって、大体２通りの食い方が想像される。但し、その食い方が果して蕾の固さやその発育程度等、季節的に変るかどうかは、疑問のまま置きたい。

さて、梢に栖る幾羽かのウソは、思い思いに首を伸して、嘴で蕾を１箇ずつ捥ぎ

（次ページへ続く）

取る。そしてそれを含んで頬りにロをもぐもぐ動かし、暫くして又１つを啄む。１つの処分に一寸時間のかかるのは、蕾のままを嚥下するのでなく、保護器官と中芯の小さな「花」とを分離して芯だけを摂り、鱗皮や苞を吐き出すためである。そして蕾は嘴で噛み剪るのではなく、捥ぎ取ると見たのは、啄む刹那の動作や、梢に蕾の基部の鱗皮が、そのまま残ることによって斯くと想像される。又保護器官を吐き出し、芯だけを摂ることは、樹下に墜ちる物質の殆どが、ばらばらになった鱗皮と、傷付いた苞であることが何よりの証拠といえる。

しかし、あの剪定鋏のような感じがする、鋭くて巨大な嘴を持つ彼等が、斯様な摂り方をするのには何処か慊らぬものがあった。が、果して３月も半ば過ぎ、桜の蕾もそろそろ動き出した頃の一群は、前と違う方法を見せた。即ち、彼等は首を捻って蕾を横に啣えてすぱりと噛み截って元の姿勢に帰る。――と思うと直ぐに次の蕾を啣える。これを素ばらしい速さで、続けざまに３回、４回、５回と繰り返すのであった。蕾を捥ぎとったのではなく噛み截った証拠の一つは、枝に残る蕾の基部が、捥ぎ取りの場合のように鱗皮が鱗立たず、斜に一文字に截られていることによって直ぐに区別される。

それはそうと元々動作の鈍い彼等が、一体どうして斯くも忙しい食い方をするのであろう。実際そんなに腹が空いているのだろうか。兎もあれ、蕾を噛み切る練習をしているのではなく、徒然の遊戯でもなく、又鼠が物を噛り、猫が爪を磨くと同様に、嘴に刃をつけるためでもないらしく、明かに腹を満しているのである。――といっても、決して蕾をそのまま嚥み下すのでなく、忙しい中にもやはり棄てるものは棄て、摂るものは摂っている。

では、如何な方法でこうも素早く必要な部分と、不必要な部分とを分離するか。それは実際には見られなくとも、樹下に散らばる物質、褐色鱗皮の大部分は剥げているが残りの鱗皮と苞からなる保護器官の残骸が、丁度道化役者の冠る円錐形の帽子のような恰好をしていることによって容易に想像される。

即ち、その蕾、その残骸こそは嘴によって花の付着部すれすれのところから噛み取られ、噛み切ってロに啣むと同時に截断部から花だけが抜き取られた不要物である。

そしてその花を目にも止まらぬ早さで抜き取る役目をするものは、勿論あの異様な恰好をした舌でなければならぬ。尤も多くの保護器官の残骸の中には、時に截りロから縦に一条の傷のあるものが発見される。これは流石の彼等も見当が狂って、截りロから花を摘み出せないので、更に噛み直して傷をつけ、その裂目から花を引き出したのに相違な

（次ページへ続く）

い。私は斯うした摂食の仕方こそは彼等の本領、真の食い方ではないかと思う。

呆れる贅沢さ　彼等の蕾の食い方が大体判ると、誰しもその器用さと、その贅沢さと、質の悪さとに呆れる。一体、あの冬の小さな蕾から、花を護る十重二十重の鱗皮を除き、更にその内部の厚い苞まで棄ててしまっては後に何が残るだろう。勿論小さい小さい花だけである。しかもその花は、やがては爛漫と咲き誇る花であるが、この頃には蕾に割合して何十分の一か何百分の一かの実質しかない。丁度粟粒ほどのものが３つか４つかに過ぎない。

味もそっ気もなさそうな、最外部を包む 14、5 枚の褐色鱗皮は暫く措き、その次層の緑色肥厚のもの４枚か５枚と、更にその内部の――直接花を包む――苞は、中芯の花に較べて風味や栄養価、消化の点で、彼等が選り好みする程、実際に劣るのだろうか。又摂る労力の上でも、無数の蕾をほぐして真中の粟粒ほどの花で腹ごしらえするのと、僅か数顆で満腹する保護器官を摂るのとどっちが楽か――。といったところで、悪戯者のウソには、こういう経済的観念や栄養上の智は微塵もありはしない。彼等は唯だ本能のままに、徒に蕾を浪費し乱費するのである。

ともあれ、この贅沢者が１日の糧として幾何の蕾を消費するか。私は彼等の夜間の空腹が大体満足したと思う時刻を計って、時折１、２羽宛捕獲し、口腔から砂嚢内にある花数を克明に算えたが、200 箇以上嚥下の箇体を示すと 200 箇が２羽、240 箇と 293 箇が各１羽、最多の１羽は 370 箇であった。花は小さく虫眼鏡相手の仕事とて、若干の算え違いがあるとしても、これは完全な花だけの数である。

ところで、最多例の消費者の腹にある花の数が、幾箇の蕾に相当するか。彼等が最も嗜好し、しかも地方的に最も多い「大吉野」と呼ばれる桜種の一花蕾に蔵する花は、３つ乃至５つで、４つが最も普通である。で、仮りに４箇を基礎として計算を試みると、花の 370 箇は、蕾の 93 箇に当るのである。だから、或意味では、この１羽は 93 箇の蕾を腹に入れたとも言える。

さて、彼等の一群を仮りに 20 羽とし、又その１羽１羽が 370 箇の花で一先ず満足するものとせば、彼等全部の消費する蕾の量は、実に 1,860 箇の驚く可き数字となるのである。しかし彼等は決して１日にこの 1,860 箇で満足するのではない。彼等の砂嚢内に常備の消化剤――繊細な無数の砂粒――があって、軟かい花を忽ち粉砕し、弥が上にも食欲を唆り、殆ど終日食い足し、食い続けて飽くを知らないのだ。小さな花の名所が、一冬に 20 羽か 30 羽のウソによって台なしにされるのも、素よりこのためで、これには毫末の誇張もないのである。

（次ページへ続く）

樹種の嗜好　ところが、この贅沢者のウソにも桜の品種による嗜き嫌いがある。否、贅沢者であるから、特に選り好みをするのかも知れない。玉川堤の「大吉野」が彼等の嗜好に投ずることは既に述べたが、その大吉野の所々に混ずる他の桜種の被害程度は、白い花の咲く１種が３割５分程度、俗に「彼岸桜」と言う早咲きで花の小さいものと、今一つの八重咲きの２種は殆ど無害であった。

桜の品種による嗜好は、蕾の大さか、保護器官の構造か、或は風味の良否によるか一切不明である。しかし、玉川堤栽植の４種類の蕾の大さを比較して見ると、彼等の随喜する「大吉野」は最も大きく、白花のものがこれに亜ぎ、他の２種のものは掛け離れて貧弱で、如何にも食い堪えのなさそうなものである。

彼等が玉川堤附近の果樹園に栽培する桜桃に、全然嘴を触れないのは聊か意外であった。そしてこれは単に昭和２年の春だけでなく、他の年でも同様である。否、桜桃樹がウソにやられた歴史がないとは業者の話である。蕾の大さの比較では、桜桃は「大吉野」と白花のものと中間に位するのであるから、これには何か他にも原因があるのであろう。

それは兎も角、果樹の桜桃を好まぬことは、栽培者は素より、彼等自身にも非常な倖　である。それは若しも彼等が観賞用の花桜と栽培果樹との見境なく食うならば、忽ちにして業者の忌憚に触れ、とうに撲滅の声が起って、この愚鈍な者共は、片っ端から退治られているに違いないからである。

彼等への弁護　以上述べたように、ウソは時として桜の名所を台無しにする憎い鳥である。けれども、最後にこの憎くて可愛い彼等のために、一つ弁護して置きたい。それは東北地方、特に内陸方面に見る現象で、何年目か何十年目かに一度の割合に全く花の観られぬ年があり、動もすればこれをウソの仕業と誤認される虞れがある。だが彼と此とは素より混同すべきではない。

この原因は素より花蕾の凍死である。多分不時の寒さにやられるものと思われるが、参るのは中芯の花だけで保護器官は生存する。だから季節が来ると鱗皮が開き、苞が伸びる。この保護する器官が生き長らえて、保護される本尊が参る。しかも保護器官が主の死を知らぬげに、季節に促されて綻びることは、たしかに植物界の不思議、自然界の奇観である。

人物紹介・仁部富之助

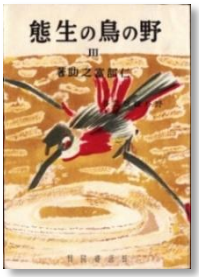
にべ　とみのすけ（1882－1947）　明治―昭和時代前期の育種技術者、鳥類研究家。

1882（明治 15）年 12 月 15 日、秋田県由利郡道川村(現・由利本荘市道川地区)に生まれる。小学校に通うため叔父の家に寄宿、馬の世話や庭掃除の合間を縫って近くの鎮守の森を訪れ、アカショウビンなど野鳥に親しむ。1898（明治 31）年、秋田県簡易農業学校（後の秋田県農業学校）に入学、特待生としての待遇を受け、農業研究者としての将来を志す。

1902（明治 34）年に卒業後、花館村（現・大仙市）の農商務省農事試験場・陸羽支場に勤務。当時東北地方を見舞った未曾有の大凶作に、米の品種改良が急務とされ、本省から派遣された寺尾博技師の助手として、冷害に強い米づくりに取り組む。長期間にわたる地道な作業を経、1921（大正 10）年、美味しくて冷害にも強い米「陸羽 132 号」が誕生、現在の「あきたこまち」の先祖にあたる。米の研究者としての成果の傍ら、野鳥の研究も並行、1924（大正 13）年に陸羽支場を退官後も農商務省嘱託として野鳥研究に生涯を捧げる。住居としていた花館村周辺という狭い観察フィールドながら、観察の内容はきわめて緻密、ａ）鳥の地方の呼び名、ｂ）渡来期と渡去期とコース、ｃ）鳴きと期間・季節、ｄ）繁殖期での巣づくり・産卵・抱卵・孵化・巣立ちの時期状況など、ｅ）食性、ｆ）季節・天候と鳥の生活との関係、ｇ）非繁殖期の行動など、と多岐にわたる克明な観察記録を日記に残す。この「野鳥日誌」は、身体が衰えを見せはじめた昭和 20 年頃まで書き続けられた。仕事の合間をぬって発表された研究報告も膨大な量に。この記録をまとめた本「野の鳥の生態」が 1936（昭和 11）年に出版されると、徳富蘇峰や昆虫学者の大町文衡（大町桂月の子息）など各方面から絶賛のコメントが寄せられ、「鳥のファーブル」とも呼ばれるようになる。実際、常に手元に「ファーブル昆虫記」を持って研究の助けとしていたと言われる。カッコウの雛鳥が自身の生存のために、同時期に孵化した他の野鳥の雛鳥を巣から追い出す習性があることを、世界で初めて発見するという成果も。

1947（昭和 22）年 1 月 11 日死去。

「野の鳥の生態」四つの異装本比較



日新書院版／
Ⅰ：昭和 16 年 4 月 28 日
　序：内田清之助
Ⅱ：昭和 17 年 5 月 7 日
　序：内田清之助
　表紙絵：田口秋魚
Ⅲ：昭和 18 年 12 月 30 日
　序：大町文衛
　表紙絵：不明
文部省推薦図書

光文社版／
上：昭和 26 年 4 月 15 日
　序：内田清之助
中：昭和 26 年 5 月 15 日
　序：大町文衛
下：昭和 26 年 5 月 20 日
　序：内田清之助
　あとがき：仁部正五
全巻共
　写真：下村兼史
　口絵：小林重三

大修館書店版／
1：昭和 54 年 5 月 10 日
　「注解」：浦本昌紀
　「意義」：浦本昌紀
　「東洋のファーブル・仁部富之助」富木友治
　「本書と著者」：仁部正五
2：昭和 54 年 7 月 20 日
　「注解」：浦本昌紀
3：昭和 54 年 6 月 20 日
　「注解」：浦本昌紀
4：昭和 54 年 8 月 20 日
　「注解」：浦本昌紀
5：昭和 54 年 9 月 20 日
　「注解」：浦本昌紀

野の鳥の生態／巣林書房（表紙書影）

巣林書房版は函付上製の立派な出来の本である。本文中に装幀者及び表紙画についての記述はない。ただ表紙右下に「良孝」のサインがある。月報第 16 号の「表紙の本」で取り上げた中西悟堂の『昆蟲読本』と装幀、表紙画に共通する画風が見られ、姉妹本として見てとれる。表紙右下にやはり良孝のサインが見られ、本文中には「装幀案　牧野吉晴、装幀画　河村良孝」との記述がある。函と表紙に楽しい原色画が描かれた美しい本。

発行後間もなく文部省推薦優良図書に指定され、続篇を出す計画であった。結局Ⅱ・Ⅲ巻が巣林書房から出版されなかったのは中西悟堂『昆虫読本』下巻と同じ。

野の鳥の生態　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ／日新書院（11 頁上段）

日新書院版のⅡ・Ⅲはわら半紙のような紙を使い、表紙にちょっと厚めの紙を貼り付けただけの並製本。Ⅱの表紙は平福百穂の門下田口秋魚の原色画、Ⅲは表裏表紙に作者不明の原色画が描かれている。同様の本は日新書院版の他の生物関係の本にも見られる。悟堂の本にもいくつか見られる。なおⅡの表紙には「野外観察叢書」とある。このシリーズの本が同様の装幀の本である。安っぽい本ではあるけれど。本の軽さと表紙の原色画。つい手に取ってみたくなる愛すべき本である。

野の鳥の生態　上・中・下／光文社（11 頁中段）

光文社版の全集は日新書院版のⅠ・Ⅱ・Ⅲそれぞれの巻末に遺稿 13 編を案分収録したもの。もともとこの 13 編は著者が第４巻用として用意していたものである。原色版口絵を小林重三が、口絵・カバー・扉の写真を下村兼史が担当している。

野の鳥の生態　１～５／大修館書店（11 頁下段）

野鳥の生態についてほとんど参考文献のなかった大正時代の初期に、稲作との関係からスズメに始まった鳥類生態に関する研究成果に、現在進歩せる生物学からみて、かみ合わない点があるのは当然のことである。したがって大修館書店版では、光文社版で各巻末に案分された遺稿 13 編を第４巻としてまとめ、未発表短編を収録、さらなる未発表遺稿を第５巻として収め、各巻の巻末に浦本昌紀氏による注解を収録している点で価値がある。

☙ 活動報告 ❧

氾濫黒川探検
９月１３日（日）　天気・はれ

草もみじの田代山湿原を訪ねるはずだった９月 13 日（日）の山行は、その数日前から関東・東北一帯を見舞った水害のため中止、代わりに、黒川氾濫の跡をたどる「観察会」を実施しました。市内最下流の壬生町との境から上流に向かって、なるべく川沿いに車を走らせ、流域の様子を観察します。すでに水は退いてきて、流れる水もきれい、しかし見慣れた川の風景は、堤防や川沿いの道路や橋が崩落・流失したり、漂着物に覆われたり、と様変わりです。洗われた石ころで明るい色の河原に、川の水が引いて取り残された水たまりには小さな魚が群れ、泥の上には獣や鳥の足跡が残り、生き物たちもたくましい姿を見せていました。一方、田んぼの中には収穫間際の稲が総倒れで泥を被った痛々しい姿を見せる所もあり、床上浸水の被害を受けた家では、濡れた畳や家財道具を外に運び出したり、粗大ごみの山を築いたりの様子も見られます。時折網を入れたりで、例によって時間切れ、旧市内にも至らぬまま今回の観察は終了となりましたが、水の去った後にその「仕事」を追うだけでも「水の力」について改めて感じることの多い半日でした。

↑楡木橋付近の崩落した道路
←橋脚が一部流失した(旧)上殿橋
↙川の中に取り残された謎の橋？
↓収穫間近の稲も水をかぶる

❀ 参加者

石崎裕子、阿部瑞穂・良司・みゆき（計４名）

❀ 写真

↑倒木、流木、新しい川筋…
↓泥の上にもう鳥や獣の足跡が

鹿沼の鎮守と古木

粕尾、松崎と大越路の鎮守とスギ、ユリノキ、ポプラ

粟野を思川に沿って進み、柏木から下粕尾に入った所、松崎という集落に入って右手に鳥居がある。その突き当たりの森に「村社星宮天満神社」がある。堂内には鹿沼市指定文化財「懸仏　天神坐像」が鎮座するという。拝殿の裏に回ると囲いの中に朱塗りの色あせた本殿が見える。境内に「軍馬霊神」他、いくつかの大きな石碑が見られる。森をつくっているスギのうち、特に３本は樹齢をかさねており、加蘇山神社のそれに次ぐ程の巨樹である。

思川に沿った道に戻ってさらに進むと大越路に入る。ヒガンバナで知られる真言宗常楽寺のすぐ手前、やはり右手の細い路地の突き当たりに「八幡宮」がある。板の囲いの中に朱塗りの本殿があるのみ。入口には「馬力神」が１基立つ。

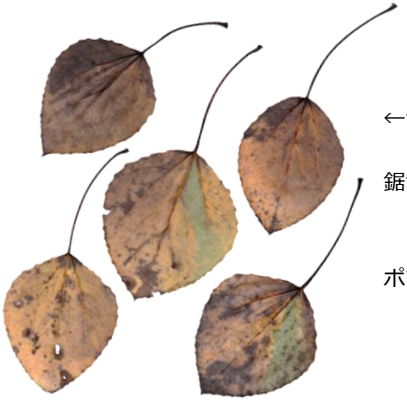
思川に沿ってさらに進み、右に常楽寺を見て、左に大越路峠への道（永野に至る）を見送り、中粕尾に入った所、やはり右手に小さな森があり、鳥居が立つ。「村社五柱稲荷神社」とある。拝殿、本殿、共に白木と見られる。本殿の扉に使っている黒塗りの金具が目を引く。

思川沿いの道を引き返して大越路峠への道に入る。かどに農産物直売所があり、思川を渡る新しい大きな橋があるが、その下にある古い橋を渡る。突き当たりの旧道は通行止めで左に曲がり、思川に沿って下流側に進む。川沿いのスギ林の切れる手前、林の奥の川のほとりにユリノキ（半天木）がある。葉のある季節なら、手前から見るとスギの林の上にその梢が抜きんでて、大きな半天の形をした葉が見えるはず。胸高周囲 363cm。さらに下流に向かって進むと、製材所の中に入ったように思えるが道は続いており、草地を進む。左手に大きな木が見える。胸高周囲 280cm。昨年、福田一男先生にここを案内していただいた時、先生はドロノキと何かの雑種ではないかと言っていた。枝ぶりと葉の形からして、僕はポプラじゃないかと思う。昔、北小学校の校庭の東側の地境に沿って何本かの、たぶんポプラが立っていた。それに似ているからである。ポプラはヤナギのことだし、ドロノキ（ドロヤナギ）はヤナギの仲間だから種類は近いのだけれど、ドロノキは戦場ヶ原や千手ヶ浜のバス停で見たことがあるくらいだから、低山帯でもやや標高の高い所の水辺に生える印象がある。

（次ページへ続く）

ドロノキの葉は楕円形に近く、鋸歯が細かいはずなのでドロノキそのものではない。外来種のポプラにも多くの種類があるらしい。ヨーロッパポプラ、カロリナポプラ（アメリカポプラ）、イタリアポプラ等。そもそも日本ではヤナギ、というと細長い葉が多く、しかも種類が多くて同定はむずかしい。次頁で紹介するヤマナラシは例外で、ふつうは花が葉の展開の前に咲くか後に咲くかで同定作業を始めなければならない。立っている場所からして野生（ここで種子が発芽して育った）と思われるが、ユリノキもポプラも外来種ということからして、距離は 100m 以上離れてはいるものの、何か関係があるように思えてならない。

山口さん、ヤナギ、ポプラについてご教示いただけませんか？　　（阿部良司）



←ヤマナラシの葉
枝は長い
鋸歯は間隔を置く

ポプラの葉と幹→
枝は短い。
鋸歯は密

↓ユリノキの葉と幹
（左・若木、右・老木）

スギの幹→

Unique な鹿沼の植物

ささやいてほしいヤマナラシ

茂呂山は散策する人が多くなって公園化を進めているのだろうか、ずいぶん伐採が進んだものだ。独り立つこの山は平野の中にありながら山地帯の樹木の種類が多く、僕は「自然植物園」としてなるべく手を加えず、そっとしておいてほしいと思う。樹木の種類が多いから、特定の樹木の葉を食草とする蝶や蛾もその種類が多く、おのずと昆虫の森としての価値も有しているのである。植物の種類が多いから、昆虫の種類も多いし、それを食べる野鳥も、多くの種類が訪れるのであり、またこの山で繁殖する野鳥も多く、それが茂呂山が「野鳥の森」たるゆえんなのである。茂呂山の雑木（ざつぼく）を伐採することは「野鳥の森」から野鳥を追い出すことに他ならないことを、茂呂山を管理する方々には知っておいてもらわなければならない。

雑木を伐採して見通しが良くなったけれど、なぜかヤマザクラだけは残してある。千手山や富士山についで、茂呂山までもサクラの名所にしたいというのか。サクラの名所になれば、集まるのは樹液を吸うセミと、葉を食うケムシ、そして花の蜜を吸うメジロと、蕾を食うウソぐらいのものだ。

花木センターに車を置いて車道を渡り、「茂呂山野鳥の森」に入る。右にトイレ、左に池を見ながら砂利道を登って行くと右側に２本のヤマナラシが立っている。周りがやたら見通しが良くなったのでこの木も伐採されたかと思ったが、何とか残っていた。その先にもヤマナラシが１本あったはずだが、こちらは他の木々共々きれいに刈り払われている。残っていた２本のヤマナラシの葉は 11 月１日現在まだ青々としているが、落ちている葉はないかと探してみると、赤や黄色に紅葉している落葉がなんとヤマナラシなのであった。ということは、ヤマナラシの葉は紅葉したとたんに落ちてしまうのだろう。紅葉の葉を付けたヤマナラシの木は見ることができない、ということか。新しい発見！

ヤマナラシは「山荒らし」に響きが似ているためか、ちょっと荒々しい印象があるが、その語源は葉と葉がぶつかり合って山が鳴ることにある。葉柄が縦に扁平なので、葉は上下に揺れにくく、左右に揺れやすい。実際は葉も葉柄も持ち前の柔らかさで、

（次ページへ続く）

色々な形でぶつかり合うのだろう。僕はその音を聞いたことがないけれど、ヤマナラシの葉は左右に揺れ、隣の葉とすれ合って、カサコソと、涼やかな音を出してほしいと思う。そしてぜひささやいてほしいのだ、「森をそっとしておいて下さい」と。

※　写真でご覧の通り、ヤマナラシの幹には黒い菱形マークがある。マメ科の樹木に、やはり黒い菱形マークの幹の樹木があったと思うがはっきりしない。黒くない、四辺だけの菱形マークを持つ樹木に、ウラジロノキ（茂呂山にある）、サワシバがある。　（阿部良司）

↑幹を見上げる

←見上げた葉

↓幹の菱形

カラフルな落葉→

自然観察クラブ・12月の予定

１２月２０日（日）

鹿沼・壬生・真岡

～神社仏閣・古墳・城跡・巨樹探訪と根本山ハイキング～

鹿沼・愛宕神社と判官台一里塚（エノキ）、判官塚古墳、磐裂根裂神社

～壬生・羽生田城跡、歓喜院（真言宗）、長塚古墳、茶臼山古墳、富士山古墳

～壬生寺（天台宗、慈覚大師円仁の生誕地、イチョウ）、愛宕塚古墳（ケヤキ）、牛塚古墳、

車塚古墳～真岡・中村八幡宮（スギ・ヒノキ・ケヤキ・カシワ）、荘厳寺（天台宗）

～専修寺（浄土真宗、ケヤキ・シダレカツラ）～根本山ハイキング

虫のいる風景・1

熊谷（くまがい）初見録

お盆前であったと思う。仕事が終わったらオニムシ採りに行こうと思っていたが、いよいよ出発する時には10時になっていた。夜にオニムシ捕りに行ける場所といえば、車を置いてせいぜい数十mの所だろう。勝手知ったる雑木林のこと、いつも行っている穴場ならたとえ夜でもどこでも行けるとは思うが、何と言っても手っ取り早い場所に限る。ひとり真っ暗闇の雑木林の中で、「ウラから肩たたかれたらやだんべなー」と思いながら、車道わきに車を置いて林の中に入って行く。ここはヒノキの植林地だが、まっすぐに進んで行くと、10mおきくらいにクヌギの大木が4本ほど立っている。目指すはいちばん奥の最も太く、うろがあって樹液をたっぷり出しているクヌギだ。ヘッドランプをうろに向けると大きな蛾がバタバタと僕の顔にぶち当たってきた。樹液が流れしたたり、黒く光っている所に「甲斐っつぁん」（コクワガタ）がたかっている。「ずいぶんでっけえなぁー。熊谷じゃなかんべなぁー」と思いながら、オニムシ箱へポイ。「うち帰って図鑑で調べんべ」と考えて引き返す。まっすぐ進めば車を置いた車道に突き当たるはずである。ところが様子がおかしい。「道はどこだっけ？」 道とは言っても踏み跡もない道なのだが。とりあえず「クヌギの木に戻ってみっか」と方向を変えてみたが、クヌギの木は見えない。ヘッドランプの光は10m先にも届かないのだから。まさかこんな小さな雑木林で遭難するとは思わなかった。方向も全く分からないまま、とにかく藪をくぐりながら歩き回る。しばらくして車の音がした。と思ったとたん、目の前をヘッドライトをつけた車がブウーンと走り去って行く。僕の車は目の前に置いてあった。「こんなとこで遭難すんべとは思わなかったなぁー」

鹿沼では郊外の山へ入れば、あるいはその麓でも、「武田」（ミヤマクワガタ）の領域となる。一方、平地林では「上杉」（ノコギリクワガタ）の他、「甲斐っつぁん」（コクワガタ）が多く、スジクワガタも稀に見ることがある。鹿沼でオオクワガタを捕った話は聞いたことがない。鹿沼では「甲斐っつぁん」「上杉」「武田」「熊谷」というのがオニムシの種類であるが、僕はこの歳になるまで熊谷を見たことがないし、それがヒラタクワガタであることを知ったのは最近のことである。しかし、ひと回りも年上の人に話を聞いてみると、「昔は熊谷もとれたよ」という人が時々おられる。

オオクワガタの大腮（おおあご）はきれいな曲線を描いており、先端も円を描いて終

（次ページへ続く）

わる。内歯は大形のものは先端に近く、小形のものは基部に近い。

ヒラタクワガタ、コクワガタ、スジクワガタの大腮は共に直線状に近く、先端で急に円を描いて内側を向く。

ヒラタクワガタの内歯は大形小形共に基部に近い所にあり、先端と内歯の間に数個の鈍歯が見られる。

コクワガタの内歯は大形中形共に中央または先端寄りにあるが、大形のものはさらに先端近くに1小鈍歯があり、中形は先端の鈍歯は消失、小形の中央の内歯は基部に近づきほとんど消失する。

スジクワガタは中央の先端寄りに2歯状の突出がある。

僕がこの歳になるまで熊谷を見たことがなかった、というのは夜遅くにオニムシ捕りに行ったことがなかったから、つまり熊谷が完全な夜行性であるためだろうか。もっとも昔の子どもたちがそんな遅い時間にオニムシ捕りに行ったとは思えない。

そもそも甲斐っつぁんと熊谷の大腮の形態を認識していない人がたまたま熊谷を捕まえたとしても、余程大型の個体でない限り、「ちょっと大きな甲斐っつぁんだ」で済ましてしまう可能性が高い。甲斐っつぁんを捕まえた時はぜひ内歯の位置と形を確認することをお勧めする。

鹿沼ではオオクワガタは見られない、と書きました。ところでクワガタムシの幼虫の餌となる「朽ち木」。ペットショップで売られている「朽ち木」はシイタケを栽培したクヌギやコナラ、クリ等と思われますが、クワガタムシの種類と、その幼虫のえさとなる朽ち木を作ったキノコの種類には関係があるのでしょうか。山口先生、解説をお願いします。

スジクワガタ　ヒラタクワガタ

《図鑑》

熊谷（ヒラタクワガタ）　甲斐っつぁん（コクワガタ）

《実物》

コクワガタ　オオクワガタ

《図鑑》

虫のいる風景・2

コガタススメバチ

10月9日、明日は祭り。草地から森林へと遷移しつつある隣の空地をなんとかしようと草刈りを開始。草や木が生い茂っているその上に、さらにツルがはびこり、刈払機の操作に難渋していると、ハチに取り囲まれた。思わず刈払機を放り投げて逃げ出した。アシナガバチより少し大きいハチである。ハチへの備えはしておらず、頭のてっぺんをやられた。翌日、やや頭痛があったのはそのせいか。

12日、ハチの種類の特定も兼ねて、捕虫網を持ち、いざハチ退治。件の場所に行ってみると、地面に直径十数センチメートルの球形のハチの巣があった。スズメバチの仲間のようだ。巣に捕虫網をかぶせ、網を上に拡げてハチが上に来るのを待つ。だいたい出たなと思ったところで、いったん網を閉じて捕まえたハチをネスカフェ・エクセラの大瓶に移す。全部瓶に入ったな、と思って網をはずしたとたん、1匹ブゥーンと飛び出した。慌てたものだから瓶を倒してしまい、10匹くらいのハチに、またもや取り囲まれた。カッパを着ているから大丈夫、と思っていたら、軍手の上から左手を刺された。ハチの種類は、頭部の模様と巣の形からコガタスズメバチ。2度続けて刺されると、10人に1人くらい命を落とすそうだ。今のところ生きている。　　（阿部良司）

地上に落下していた巣

ほぼ空家になったはずだが…

顔が種類を見分ける
決め手になる

層をなす巣の
外側の隙間は
放熱効果がある→

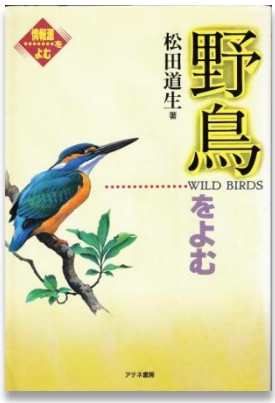
←下の方に
出入用の穴

ハチの巣って
よくできている！

∞　愛書家のひとりごと　∞

野鳥の本 BEST100

月報第３２号で「本の解説・書評・読後感・研究をまとめた本」を書いたところ、白坂さんからもいくつかの関連本を挙げていただきました。これらの本に、さらに書誌・書目関係の本を加えると、まだまだ見たことのない本がありそうです。また随筆集の中に、本について書いた文章が結構みられます。山の本でも紀行・随想は文学の分野であり、人気があるにもかかわらず未だに「日本山岳書目録」は存在しません。数が多いのと分類上の線引きをしにくいことが目録の作成を難しくしているのかもしれません。一冊の本に対しても様々な評価があってよいのだし、また聞いたことのない本が出てくる可能性があることを考えると本の解説本、書評をまとめた本はこれからも出版されてくるのでしょうね。実は名著とは自分で探すことに意義があるのです。古書目録の中から署名と著者、その他を参考に本を選んで注文し、どんな本が送られてくるかわくわくする。それが楽しいのであって、その本の中に一行でも感動的なことば、自分の興味ある分野に関する思いがけない知識が見つかれば、それは自分にとっての大切な名著になるはずです。



さて、生物関係の本について書評・解説をまとめた本。さすがにバードウォッチングの人気もあってか野鳥関係の解説本はありました。松田道生著『野鳥を読む』（1994年６月２０日、アテネ書房発行）がそれです。紹介されている 100 冊（CD・ビデオを含む）を挙げておきましょう。

入門書

『今日からはじめるバードウォッチング』日本野鳥の会編（同会、1993）
『新編鳥学講話・決定版』内田清之助（暁書房、1949）
『鳥についての３００の質問』Ａ＆Ｈ・クリュックシヤンク（講談社、1982）
『バードウォッチング入門』松田道生・岡本まさあき（山と渓谷社、1991）
『バードウォッチング図館』秋山孝（凱風社、1984）
『岩本流野鳥観察手帳』岩本久則（山と渓谷社、1978）

『鳥の世界』黒田長久（あかね書房、1960）
『鳥類』ライフ編集部（時事通信社、1964）
『日本の探鳥地／東日本編・西日本編』日本野鳥の会編（同会、1991）
『野鳥を呼ぶ庭づくり』柚木修・柚木陽子（千早書房、1990）

エッセイ

『野鳥と共に』中西悟堂（巣林書房、1935）
『鳥類学五十年』内田清之助（宝文館、1958）
『野の鳥の思ひ出』榎本佳樹（日新書院、1942）
『北の鳥南の鳥』下村兼史（三省堂、1936）
『自然手帖』尾崎喜八・串田孫一（大和書房、1964）
『野の鳥の生態１～５』仁部富之助（大修館書店、1979）
『野鳥観察日記』蓮尾純子（筑摩書房、1982）
『南の探検』蜂須賀正氏（千歳書房、1943）
『トリキチ誕生』川田潤（理論社、1959）
『東京 23 区動物探検』泉麻人（講談社、1991）
『小鳥を友として』W・H・ハドソン（創元社、1954）
『セルボーンの博物誌』G・ホワイト（養徳堂、1948）
『森の生活』H・D・ソロー（JICC 出版局、1989）

芸術・民俗

『鳥』内田清之助・亀井紫雲（三省堂、1929）
『万葉動物考』東光治（人文書院、正 1935・続 1944）
『古事類苑／動物部』神宮司庁（同庁、1910）
『画と鳥』内田清之助（梓書房、1939）
『日本博物学史』上野益三（平凡社、1973）
『自然暦』川口孫治郎（日新書院、1943）
『自然と伝承／鳥の巻』武藤鉄城（日新書院、1943）
『鳥のことわざうそほんと』国松俊英（山と渓谷社、1990）
『新潟・鳥のことわざと方言』風間辰夫（野島書店、1980）
『都鳥新考』熊谷三郎（亜細亜書房、1944）
『野鳥歳時記』山谷春潮（日新書院、1943）
『ちんちん千鳥のなく声は』山口仲美（大修館書店、1989）

『野鳥と文学』奥田夏子・山崎喜美子・川崎晶子・蒲谷鶴彦（大修館書店、1982）
『始祖鳥化石の謎』フレッド・ホイル、チャンドラ・ウィクラマシンジ
（地人書館、1988）
『世界大博物図鑑／鳥類』荒俣宏（平凡社、1987）
『謎の鶴殺し事件』鈴木亀雄（崙書房、1986）

野外鳥類学

『鳥類生態学』黒田長久（出版科学総合研究所、1982）
『鳥類の生活史』羽田健三編著（築地書館、1986）
『日本鳥類生態学資料』川口孫治郎（巣林書房、1935）
『動物系統分類学　第 10 巻（上）脊椎動物（Ⅲ）』黒田長久（中山書店、1962）
『大阪湾に渡来するシギ・チドリ類』小林桂助（自費出版、1959）
『鳥の歌の科学』川村多実二（白井書店、1942）
『野鳥の囀りと環境』森主一（京都書店、1946）
『野鳥調査マニュアル』岡本久人・市田則孝（東洋館出版社、1990）
『鳥の生活』ティンバーゲン（丸善、1959）
『ロビンの生活』D・ラック（思索社、1973）
『鳥類の生活』浦本昌紀（紀伊國屋書店、1966）
『スズメ』佐野昌男（信濃毎日新聞社、1988）
『モズの嫁入り』山岸哲（大日本図書、1981）
『エナガの群れ社会』中村登流（信濃毎日新聞社、1991）
『一夫一妻の神話』上田恵介（蒼樹書房、1987）
『赤い卵の謎』樋口広芳（思索社、1985）
『マンウォッチングする都会の鳥たち』唐沢孝一（草思社、1987）
『鳥の時代』A・フェドゥシア（思索社、1985）

図鑑・辞典

『日本鳥類大図鑑』清棲幸保（講談社、1964）
『鳥類原色大図説』黒田長禮（修教社書院、1935）
『日本の鳥類と其生態』山階芳麿（岩波書店、1941）
『飼ひ鳥』鷹司信輔（裳華房、1917）
『THE BIRDS OF JAPAN』Brazil，A.Mark（HELM、1991）
『決定版生物大図鑑／鳥類』黒田長久編・監修（世界文化社、1984）

『世界鳥類和名辞典』山階芳麿（大学書林、1986）
『日本鳥類目録／第五版』日本鳥学会（学習研究社、1974）
『コンサイス鳥名辞典』吉井正監修（三省堂、1988）
『図説日本鳥名由来辞典』菅原浩・柿沢亮三（柏書房、1993）
『フィールドガイド日本の野鳥（増補版）』高野伸二（日本野鳥の会、1989）
『野鳥の図鑑』藪内正幸（福音館書店、1991）
『カモメ識別ガイド』氏原巨雄・氏原道昭（文一総合出版、1992）
『野鳥・山渓フィールドブック』叶内拓哉・浜口哲一（山と渓谷社、1991）
『さわる図鑑・鳥』日本野鳥の会編（同会、1992）

野鳥保護

『日本鳥類の生態と保護』山階芳麿編（共立出版、1951）
『鳥獣行政の歩み』林野庁（林野弘済会、1969）
『野生鳥類の保護』日本鳥類保護連盟編（同連盟、1971）
『野生鳥獣と人間生活』池田真次郎（インパルス、1971）
『私の愛鳥講座』柴田敏隆（東京書籍、1984）
『鳥獣害の防ぎ方』由井正敏・阿部禎他（農山漁村文化協会、1982）
『日本鳥類狩猟法』堀内讃位（三省堂、1939）
『野鳥の医学』Ｊ・Ｅ・クーパー、Ｊ・Ｔ・エリー編（どうぶつ社、1987）
『はばたけオオタカ』国松俊英（くもん出版、1986）
『夏鳥たちの歌は、今』遠藤公男編（三省堂、1993）
『日本の絶滅のおそれのある野生生物』環境庁（日本野生生物研究センター、1991）
『日本湿地目録』ＩＷＲＢ日本委員会（同会、1989）
『野鳥の公園奮闘記』加藤幸子（三省堂、1986）
『四季の森林』沼田真監修（地人書館、1977）
『自然と生命のバレード』Ｈ・ストアラー（白揚社、1961）
『滅び行く野生のいのち』フェイス・マックナルティ（芸文社、1968）

写真集

『鳥類生態写真集／第１輯』内田清之助・下村兼史（三省堂、1930）
『鳥と森と草原』周はじめ（法政大学出版局、1960）
『白サギ』田中徳太郎（東京中日新聞、1961）
『野の鳥の四季』高野伸二（小学館、1974）

『カワセミ』嶋田忠（平凡社、1979）
『鳥の組曲』吉野俊幸（山と渓谷社、1991）

ＣＤ・ビデオ

『野鳥の声』日本野鳥の会（ビクターレコード、1954-5）
『日本の野鳥大全集』蒲谷鶴彦（日本コロンビア、1990）
『bird song』岩本久則・水谷高英・松田道生（主婦の友社、1988）
『イヌワシ　風の砦』群像舎（毎日 EVR システム）
『野鳥の観察』柚木修（小学館、1993）
『ザ・バードウォッチング／干潟・水辺編』ＮＨＫエディケーショナル（NEC、1994）

∞　こんな虫いました　∞

戸張町の当店には、珍しい訪問者が次々と現われます。地方都市の町はずれの、草ぼうぼうの空地が隣にあるせいか。今年の夏以降の「お客様」から一部ご紹介します。

ツメクサガ？
（8月 29 日）
羽を広げると 30mm超

オスグロトモエ（♀）
（9月 19 日）
開張数 cm、目玉模様が目立つ

アカスジシロコケガ
（9月 29 日）
レジのキーボードに
しばらく止まっていた

アシダカグモ
（8月7日）
ゴキブリ捕りの名人

オオホシカメムシ
（11 月6日）
体長 2 cm 弱、お洒落なカメムシ

番外編・オオエグリバ
（11 月7日、東京・早稲田）
体長 5 cm ほど
枯れ葉にそっくり！
大学構内のトイレにて

∞ 山書談話室 ∞

白坂正治氏→阿部良司

前略

『月報第36号』をありがとうございました。

御無事で何よりでした。自然への視点を感覚的にもっと磨く大切さを思います。

“愛書家のひとりごと”のカバーのお話、カバーの有無で古書価が倍以上になったりしますから、たかがカバー、されどカバーですね。和紙のカバーなど味わい深く、時代背景が窺えたりします。又、カバー付きの本の本体は概して綺麗なことが多く、まさにカバーされているのを感じます。

パラフィン紙は古書目録に「元パラ付き」と記載されてるのを見かけますが、赤ちゃけて少し触れただけでも破れてしまいそう(実際破れてしまう)なそれにいとおしさ、嬉しさを覚えるのはなぜでしょう？　多分、私にとって一書を読みこむには欠かせぬ演出なのかもしれません。乱筆乱文にて。　　草々

‘15．10．14

阿部良司→白坂正治氏

田部重治の著作の第1冊目『日本アルプスと秩父巡禮』は上製本でありながら、函はもとより、カバーも付いていません。本来は元パラでも付いていたのでしょうか。他の上製本は函もしくはカバー付きですよね。田部の著作の多くは並製(表紙がやわらかく製本は糸等で綴じ、背表紙は糊付けする)ですが、手元にあるものでは『旅・人間・自然』にカバーが付いているだけで、他の並製本はすべて裸本(函もカバーも付いていない)です。以前古書目録(穂高書房？)で『青葉の旅落葉の旅』に「カバー欠」と付記されていたことを覚えています。古書目録に「裸本」ではなく「カバー欠」と書かれているということは本来この本にはカバーが付いているものだ、という古書肆からの情報なんですよね。白坂さんは他に並製カバー付きの本についてご存じですか。

本の装丁についての詳細についてはその目的とする立場からして国立国会図書館に求められるものではなく、国立図書博物館の設立を夢見るしかないのでしょう。

田部重治の著作についても、もう一度特集して検討してみたいと思います。

白坂正治氏から、主宰されている「田部重治研究会」の機関誌最新号を送っていただきました。

例年の如く『鶴のやうに』を刊行致しましたので御送付申し上げます。今号では、田部先生の代表作「笛吹川を溯る」を考察してみましたが、どこまで溯れたかは当時の笛吹川より未知（？）です。どうかご一読くださいませ。乱筆乱文にて。

11月1日

白坂正治

「鶴のやうに」第15号、頂戴いたしました。「鶴聖の河」で取り上げられた「笛吹川を溯る」。収録された、また再録された作品がそれぞれの本によって文体が変わり、それぞれの文章表現であたかも別の作品のように生まれ変わり、それぞれの価値が生まれる。そんな著作を私は今まで知りませんでした。代表作である「笛吹川を溯る」を初めて読んだ、などと言うと恥ずかしい次第ですが、正直、感動しました。本誌第13号の「表紙の本」で取り上げた『山と溪谷』は、大正8年に北星堂から出版された田部重治の著作の1冊目、「日本アルプスと秩父巡禮」にその後の紀行、随筆を加え、改題されて第一書房から刊行されたものですが、その冒頭に収められた「山に入る心」は「日本アルプスと秩父巡禮」には収録されていません。しかしそれを予感させるような、「山に入る心」を彷彿とさせるような文章が、その母体となる前書『日本アルプス…』に収録されていたことを知り、嬉しく思いました。

取り上げられた3つの文章を、月報でもう一度、田部重治を特集した折に取り上げさせていただけたらと思います。

阿部良司

本号の内容

山行案内　芳賀、風薫る山里のみちハイキング
～七井駅より芳賀富士を越えて茂木駅へ＋ＳＬ乗車～・・・・・・・・・・・　2
表紙の本　仁部富之助著『野の鳥の生態』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
活動報告　氾濫黒川探検・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
鹿沼の鎮守と古木　粕尾、松崎と大越路の鎮守とスギ、ユリノキ、ポプラ・・・・・１４
Unique な鹿沼の植物　ささやいてほしいヤマナラシ・・・・・・・・・・・・・・・１５
虫のいる風景・１　熊谷初見録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
虫のいる風景・２　コガタスズメバチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
愛書家のひとりごと　野鳥の本 BEST100・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
こんな虫いました　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
山書談話室　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

鹿沼の自然・栃木の旅　月報第37号

2015年10月発行

北光・自然観察クラブ　鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人　阿部　良司

携帯　090－1884－3774

FAX　0289－62－3774

携帯✉shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail　a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→